The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	樋口一葉と明治二〇年代文芸ジャーナリズム
Author(s)	屋木, 瑞穂
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44753
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【7】

氏　　名	屋木瑞穂（やぎ みずほ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　18082　号
学位授与年月日	平成15年9月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学位論文名	**樋口一葉と明治二〇年代文芸ジャーナリズム**
論文審査委員	（主査） 教　授　出原　隆俊 （副査） 教　授　伊井　春樹　　助教授　飯倉　洋一

論文内容の要旨

本論文は「序章」、第Ⅰ部「伝統と革新――一葉初期小説と同時代の文芸ジャーナリズム」の第一章「『闇桜』の位相－〈筒井筒〉変奏－」、第二章「記憶の風景－『雪の日』論－」、第三章「『暁月夜』の技法－古典復興の出版界動向との関連から」、第Ⅱ部「下層社会への視線――一葉と新聞メディアー」の第四章「『琴の音』論－ヴィクトル・ユゴー『哀史』との比較を通して」、第五章「『暗夜』論－下層社会と犯罪・明治二〇年代ユゴー・新聞メディアー」、第Ⅲ部「明治二〇年代文芸雑誌の一側面」の第六章「『都の花』における〈閨秀小説〉－女性作家と雑誌メディアー」に「『女学雑誌』を視座とした明治二二年の文学論争の再検討」が、「付章」として付けられている。およそ156000字（四百字原稿用紙換算で約390枚）である。

第Ⅰ部では、『日本文学全書』などの古典復興の動きと、様々な媒体に掲載された同時代の小説を視野に入れて、それらと比較する形で一葉の初期小説の特徴を浮び上らせようとする。〈筒井筒〉のモティーフや〈懺悔物〉の形式が多用される中で、その枠を取り込みつつも、新しい領域を開拓しようとする一葉の小説の独自性を深めようとする。西行歌の使用の意味についても解明を図る。また、第Ⅱ部では、貧民の存在が社会問題化する状況の中で、救済キャンペーンを展開していた『国民新聞』に抄訳が掲載されたヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』などと一葉小説の関係を明らかにする。幾つかの共通点から、一葉がそれらを取り込んでいたことを論証する。そして、従来は等閑に付されてきた登場人物の存在の意味に照明を当て、新たな読解を試みる。第Ⅲ部では、女性作家の起用に積極的であった雑誌『都の花』における一葉の登場の意味を考察する。

論文審査の結果の要旨

それぞれにおいて、同時代の作品を博捜して、これまでに十全には検討されてこなかった問題点を明らかにして、研究の前進に寄与していることは疑えない。しかし、更なる検討が要請される部分も少なくない。まず、何よりも一葉の初期小説に絞っていることと論文の題目に整合性があるのかが問われる。

〈懺悔物〉との関連で独自性を指摘する『雪の日』については、これが鷗外の『舞姫』を下敷きにしていることが既に指摘されており、この点からは『雪の日』が初めての達成ではないことは明らかである。また、『琴の音』や『暗

夜』について、焦点が当てられることのなかった人物に注目したことには重要な意義があるが、しかし、従来検討されてきた部分への新たな検討などがなされないと、全体を覆う作品論になりえないのではないかという疑念から自由になりえないだろう。

また、「文芸ジャーナリズム」や「新聞メディア」といった用語についても、その用語にふさわしい検討がなされているのかという点でも、十分ではないのではないかという印象を払拭できない部分がある。様々な媒体の機能について、総合的な検討がなされていないのである。ただし、これらについては仰々しい表現を採用しないことで弱点を免れることも可能であるかもしれない。

このように、さらなる追求を期待する要素が少なくない。しかし、古典文学との関連でも、単発的な比較に止まらず、一定の体系付けを行なうことや、ユゴー作品との関係の指摘などは、従来の達成を大きく更新しており、審査委員会は博士論文（文学）としてふさわしいと認定する。